

フランスにおける社会主義の歴史(二)

湯村, 武人

<https://doi.org/10.15017/4362418>

出版情報：経済學研究. 21 (3), pp.21-54, 1956-01-20. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

フランスにおける社會主義の歴史（Ⅱ）

湯 村 武 人

第二章 バブーフとその敗北

第一節 裏切られた労働者

フランス革命がブルジョワ革命であるかぎり、これまでにみえてきた農民をめぐる考察について、都市における革命的諸勢力、すなわちブルジョワと民衆について検討することもまた、忘れることができない。農民大衆は、彼らがいかに現存秩序に不満をもつていたとしても、彼らの力だけでこの大掛かりな政治的社会的変革を企てるに足るほどの、活力を欠いていた。なるほど領主館の攻撃に農民を駆りたてたのは、彼らの封建領主に対する怨恨であり、彼らの苦悩である。彼らの状態は改善されることからはほど遠く、彼らの物質的境遇は拡大されるどころではなかつたし、却つて逆に、旧制度末期を特徴づける大きな農業危機の中にますます狭くされ、ますます惨めなものになつていつた。農村の住民達は、飢にかられて森の外にとび出す野獣のように飛びかかつて行く。けれども、彼らに自信を与えたものは、パリをはじめとする大都市におけるブルジョワジーや職人達の態度であり、あるいは言葉で、あるいは行動で示される彼らの大胆さだつた。一七八

九年の農民暴動は、もしもそれが都市におけるその他の諸蜂起によつて引継れなかつたならば、それ以前における多くの場合と同様に、ユナゴナに粉碎されていただろう。この点ルフェーブルの明確に指摘するところである、「恐怖は七月十日に始まつたわけではない。それ故農民が反抗するのに首府の動きを待つていたと考えるのはまちがいで、その近郊の動きで充分であり、それさえも缺くべからざるものではなかつた。ツーロンとマルセイユでは三月末、パン価格の騰貴が叛乱に駆つており、その運動はたゞちに上プロヴァンス全体に及んでいた。ガブ地方の、アバンス谿谷の村落は、四月二十日領主に向つて暴動を起しており、カンブレでは、五月六日に暴動が起つていた。……しかし、七月十四日の大きな振動が決定的な影響を及ぼしていたことは言うまでもないことである。」^(註)フランス革命が農民の革命である以前にまづブルジョワジーの革命であり、ついで民衆の、ことに労働者の革命だつた所以である。ルフェーブルはさらに、その数を正確に数えることのできるバスターヌの攻撃の参加者に関していう、「(この中には)、あらゆる社会階級が選ばれていた。しかし、そのリストに当つてみると、戦士の大部分がサン・タントワヌ街およびマレ地区の織物職工であるのは、明らかである。革命を通じて、叛乱の主力は何よりも先に職人、小店主階級の中にあつた。実際にニユースを回附し、示威運動を指導したのは、無智な顧客ではなくして、親方と店主であり、また計画を建てたのも彼等である。職人乃至労働者は、異つた階級の一員としてではなく、織物工業の一人の仲間として、^(註)彼等のうしろに従つていた。」

だが、都市におけるこの革命勢力、ブルジョワと労働者とは、革命を遂行することにおいて同じように貢献したのにも拘らず、いや都市における革命を実際に押し進めたものは労働者だつたにも拘わらず、革命の結果を独り占めにしたのは

ブルジョワジーだつた。ブルジョワジーは、たゞ単に封建制度を倒して政治的権力の保持者になつただけではない。彼らはこの革命的激変期にその経済力をも強化した。彼らは、一方にアッシニヤ投機によつて巨額の蓄積をなし遂げただけでなく、他方には没収された亡命貴族や僧侶の所有地、すなわち国有財産の売却によつてその所有地を拡大した。国有財産は、財政上の理由から僅か数年間に競売にふされたが、これを買取ることができたのは、基本的には、農村における富農層と都市における彼らだけだつたからである。さらに、これはことわるまでもないことだが、経済的自由主義が完全に打ち取られた。生産と交易の自由は十分に樹立され、国内市場は内国関税の廃止によつて統一された。もはや彼らブルジョワジーの企業精神に対立する、いかなる障物も存在しない。それにも拘わらず都市の労働者は、一七八九年の変革によつて事実上殆んど何も獲得しなかつた。パリの下町の労働者達はパリにおける革命の主なる推進者であり、地方における労働者達もまたパリの彼らの同僚にならつたが、彼らが実際に獲得したものは、きわめて長い間空虚なものとして止まることになる唯一つの言葉、すなわち平等という言葉だけだつた。

たとえば、一七八九年の《人権宣言》はすべての市民が法の制定に参与する権利があると宣言しているが、これを立法化した立憲議会（一七八九〜一七九一）は、金持だけにしか選挙権を認めず、彼らのいわゆる《受動的市民》を選挙権から除外することを敢てした。すなわち、この奇妙な言葉の案出者であるシエイエスによれば、《受動的市民》とは一定の財産をもたない人々を意味し、彼らは「自分たちの人格、財産、自由を守る」権利はもっているが、財産がないから「公権の形成に積極的に参加する」権利はないというのである。同じくシエイエスによれば、三分分の労賃に等しい額以上の

直接税（財産税）を支払うものが△能動的市民▽であり、彼らのみが「大きな社会的企業の眞の株主」であり、彼らのみが郡の首邑の第一次選挙集會に列し、自治体の吏員や選挙人を選定する。△受動的市民▽の数は約三〇〇万人であり、△能動的市民▽は約四〇〇万人である。この約四〇〇万人の能動的市民のうち一〇日分の労賃に等しい税金を支払う者が△選挙人▽になることができ、その数は五万人である。選挙人は県の首邑の選挙集會に列し、立法議会代議員、裁判官、および県庁の吏員を選挙した。そして、立法議会代議員たりうるものは、土地の所有者で金一マルク（約五〇金フラン）の直接税を支払っていないならばなかつた。つまり、二段階の選挙制度がとられ、選挙被選挙資格が所有地の大きさによつて制限され、政權は全く一部の金持のみに認められて、民衆は政治生活から除外されていたわけである。

そしてこのようなブルジョワジーの裏切りは、民衆のなかでもことに主要な革命の推進力、労働者達に対峙してとりわけはつきりしていた。ポール・ルイの前出『社会主義史』はいう、「恩恵に浴することを主張しうる国民の三つのカテゴリーのうち、たゞ彼らだけが騙された。租税の改訂は、王室と封建勢力とに対抗する上に彼らの協力が必要不可欠だつた諸年次の間だけは、彼らにも決して拒絶されはしなかつた。けれども、ブラウンシュヴァイクの宣言からエベール派の失墜に至る時期を無視するとすれば、この階級はのけものにされていた。むしろこの階級の利益に反する政治が行われた。その政治的諸権利は削減され、手足をもぎとられた。政府は、一方では農村の土地に課される地租を引下げたというのに、他方ではあれほど憎悪されていた諸間接税によつて、あるいは△統一税▽によつて、都市の職人達の上に租税負担の重圧を加えるのを、決して躊躇しなかつた。いやそれ以上のことが行われた。一七九五年の憲法は、革命の斗いのイニシア

タイプを真実にとつた人々の、権利の失権を宣言したのである。^(註四)

以下その過程を順を追つて辿らう。まづ一七八九年八月四日、立憲議會は同業組合制度が廢止されるべきことを原則として決定した。さらに一七九〇年八月二日の法令は、すべてのフランス人に、自由に会合し協議し合う権利を認めたとし、議會は、市民としてすべての人間が守らねばならない法律を遵守する限り、市民は平穩裡に集會し、彼ら相互の間に自由な結社をつくる権利をもっている、と宣言した。けれどもすでにこの頃になると、指導者達の傾向が少しづつ變つてくる。この法令自体が、辛うじて採択されはしたものの、激しい攻撃をうけた。さらに、一七九〇年と一七九一年とに爆發した諸ストライキは、労働者達の結社に疑いの眼を投げさせた。一七九一年五月、パリ市庁は組合綱領を制定して賃銀の引上げをはかつた。▲木工業労働者友愛組合▼を叱責した。けれども、たゞ単に叱責しただけでは充分ではないと思われた。そこで立憲議會は、有名なシャブリエ法(一七九一年六月一四日)を議決せねばならぬと信じた。この法律の審議のために提出された報告書は、若干の職業に従事する市民達は、彼らのいわゆる共同の利益を防衛するために組合を結成することを認められるべきではない、という。▲この国ではもはや同業組合は認められていない。もはやすでに各個人の個人的利益と全体の利益だけしか存在しない▼。要するにこの法律は、集團的協議を行つたり団結したりすることを、労働者達に禁じたのである。指導者たるブルジョワジーは、労働者達の協力が必要である間は彼らを友として遇したが、やがて自らの権利の基礎が固まつていくにつれて、その苛酷な法制によつて縛りあげられることを躊躇しなかつたのである。^(註五)

(註一) ルフェール、邦訳書一八四—一八五頁。

(註二) ルフェール、邦訳書一二三頁。

(註三) 一七九二年八月一日、なおエーベル派の失墜は一七九四年三月。

(註四) ポール・ルイ『フランス社会主義史』三七—三八頁。

(註五) 『資本論』の有名な章(第七篇二十四章、いわゆる本源的蓄積)においてマルクスもい——

「革命の嵐の当初において直ちにフランスのブルジョアジーは、ようやく獲得されたばかりの団結権を再び労働者から奪い取つた。一七九一年六月一日の布告によつて、ブルジョアジーは一切の労働者団結を五百リーブルの罰金と一年間の公権剝奪をもつて罰せられるべき自由と人権宣言とに対する侵害」であると宣言した。資本と労働者との競争戦を警察権によつて資本に都合な埒内に閉じ込めるこの法律は、幾つかの革命と王朝の交替とを越えて存続した。恐怖政治さえもこれには手を触れなかつた。それは極めて最近に至りようやく刑法から抹消された。このブルジョアのクーデターの口実以上に特徴的なものはない。報告者ル・シャブリエは言う『労働賃銀が現在よりも高くなり、それによつて、これを受取る者が、ほとんど奴隷的依存ともいふべき生活必需品の缺乏に起因する絶対的依存から免れることは望ましいが』、しかし労働者が彼らの利害について協定し、共同して行動し、それによつて彼らの『ほとんど奴隷に等しい絶対的依存』を緩和しようとしてはならない。なぜならば、彼らにかくすることによつて『彼らのかつての親方、今の企業家の自由』(労働者を奴隷状態に維持する自由!)を侵害することになるからであり、また、かつての同職組合親方の専制に対抗する団結は——何を言い出すことか!——フランス憲法によつて廃止された同職組合の復興だからである!」(向坂訳、四分冊、三一四—三一五頁)。

第二節 蜂起のコンミュニオン

けれども、すでにルフェールが指摘していたように、民衆の革命がブルジョワの革命をつき破る。裏切られた労働者達の怒りは、地方における農民の運動に鼓舞されて次々に爆発し、一旦は静まりかけていた革命の波を再び昂める。あたかもこの時（一七九一年六月二〇日）、外国にいる反革命勢力とひそかに連絡をとつて、国外に亡命しようとした国王の逃亡事件、いわゆるヴァレンヌ事件が起る。そしてこの事件は、一方においては民主主義的運動を刺戟し、他方には支配的ブルジョワジーを、デモクラシイへの恐怖からさらに一段と反動化せしめることになつた。すなわち、急進的民主主義者達は「これで国王はいなくなつた」として共和制を要求したし、他方議會は、ロベスピエールの抗議にも拘わらず、国王は誘拐されたのであるという虚構をつくつて、王制を擁護した。これまで兎も角も協力し合つていた革命的ブルジョワジーのグループであるジャコバン派は二つに分裂し、その保守派はフィヤン派修道院によつてフィヤン派を結成し、議会上右翼との提携をはかつたし、他方急進派はヨリ一段と民衆に接近していった。そしてこの左右の対立激化は、遂に七月十七日のシャン・ド・マルスの虐殺という流血の惨事をひき起すに至り、九月三〇日における立憲議會の解散の後をうけて成立する立法議會では、その対立がさらにはつきりと示されるであろう。

ジャコバン派とは、国民議會代議員のうち最初はブルトン・クラブ、次いで《憲法の友協会》の名の下に結集した、進歩的ブルジョワジーのクラブに始まる。このクラブは一七八九年一〇月頃から、議場に近いという便利から、サン・トノレ街にあるジャコバン派修道院の食堂を借りて会合していたので、彼らの敵が彼らを名付けて簡単にジャコバン派と呼ん

なのである。最初の頃は二〇〇人余りの代議員からなりたつており、党派としてはつきりした教理も何もない、漠然たる進歩派の集りだつたが、その構成要素はほど三つに大別された。すなわち最左翼はロベスピエールに代表され、中央はバルナーブに代表される人々であり、最右翼がエーギヨン公を中心とする自由主義貴族達である。それへの加入は、代議員の場合は二人の推薦者があればよいが、《外部の者》の場合には六人というように、もともと代議員中心である。

けれども、革命の進展につれて、地方にもこれに倣つたクラブが続々とできていつたし、ガストン・マルタンの『ジャコバン派』^(註)がいうように、宮廷やラファイエットなどの保守派諸勢力の同盟に対抗するための支持を、民衆の中に見出す必要から、これら《憲法の友》達の行動は、その最初の指導者達が希望していたよりも、ずつと急進的な改革を目ざすものに変つていつた。もつとも、少くとも一七九〇年までは、急進的といつてもまだ一定の枠の中においてであつて、まったく《憲法の友》というその名にふさわしいものではなかつたが、それでもクラブのメンバー数は一二〇〇に増加し、したがつてもはや代議員中心ではなかつたし、地方クラブ数も一七九〇年八月一六日の数字で一五二にも上つた。

ところが、この年の末頃から次第に昂まつてくる民衆の革命的運動、ことにすでにみたヴァレンヌ事件を契機とする民衆不満の爆発は、クラブの性格を急角度に左傾させたし、その結果、一方にクラブの最右翼がこれから離れてフィヤン派を結成したし、他方ロベスピエールやブリソを中心とする共和派の勢が大きくなつてきた。マルタンはこの左傾化を説明して、第一にはその構成メンバーが、その中心を代議員から選挙人へと移すにしたがつて、民衆との接触がより密接になつたから、第二には保守陣營の強化に対抗する上の必要から、としてゐる。彼はいう、「一七九一年五月にジャコバン派

は岐路に立たされた。彼らはその出身の点ではブルジョワである。それへの加入は、入会費十二フラン、四期納め年額二十四フランという高い会費は、能動的市民にしかその扉を開いていない。けれども、その政治的指導者達のうち最も明敏な人々は、大革命が、彼らの最初の指導者達が維持したいと願っていた枠を、すでにのりこえてしまったことを感じ取つた。クラブの大部分が——彼自身代議員であるとはいえ——金持達に反対して立ち上ることを敢てしたロベスピエールに喝采を送つた。^(註二)

このように、民衆の圧力は、一七九一年にジャコンバ派からまづ自由主義貴族の一派であるフィヤン派を分離させ、他の部分をしてより急進的ならしめたが、やがてさらに、この残りの部分からジロンド派を排除するに至る。ジロンド派とは、立法議会左翼の主流をなす人々に対してつけられた呼び名で、ブリソを中心に議会の左翼を形成する一三六名の代議員中、ジロンド県選出の雄弁家達（ヴェルニョー、ジャンソネ、カデなど）の勢力が強かつたため、後世になつてラマルチーヌの名付けた名称で、当時はブリソ派（ブリソーターン）と呼ばれた。「彼らは中流ブルジョワジーの出身だが、大実業ブルジョワジー（船主、銀行家、大商人）と関係をもち、その利益に味方した。」とソブールは定義している。つまりジャコバン派は、すでにフィヤン派を分離させたあとでもなお、「その出身と哲学的素養によつて政治的デモクラシーに傾きながらも、その因果関係と気質とによつて富を尊敬し富に仕える傾向をもつ」人々を多分に含み、いま一度民衆によつて淘汰されねばならなかつたのである。

この年（一七九一年）秋、騒擾がふたたび都市にも農村にも続発する。都市における暴動の直接の契機は食料品価格の

騰貴であり、農村は封建制の存続に怒り狂つた。十月以降、ほとんど到る処で、穀物輸送隊や市場の略奪がおこなわれた。「ボースの地方自治体は、民衆暴動の圧力をうけて、穀物や最大必要品の公定価格をきめた。エタンプでは、金持ちの皮革製造業者で市長のシモノーが公定価格の設定を拒否し、暗殺された。フィヤン派は彼を殉教者に祭り上げた。中部と南部フランスでは、亡命貴族たちの館が略奪され、焼かれた。農民大衆は封建制の全面的廃止を要求した。この社会的脅威を前にして、議会は俊巡し、分裂した。」^(註三) それに対外的困難が加わる。王弟プロヴァンス伯を中心とする亡命貴族が国外にあつてさかんに戦争を挑発し、国境に軍隊を集結して議會を脅かす。ブリソを中心とするジロンド派は、ここでついに国王と手を握り、ロベスピエールの強い反対にもかかわらず、対外戦争によつて国内の矛盾を解決しようとする。一七九二年四月二〇日、ジロンド派の強い要請によつて、ルイ十六世は遂に対オーストリア宣戦を布告するが、この戦争はやがて、ジロンド派の予想に反してこの派の没落を招き、国王の予想に反して王制の顛覆をもたらすであらう。

軍事上の敗北、政治家達の腐敗と無能とは、民衆をさらに一段と革命化する。そして遂に八月一〇日の革命が訪れる。ロベスピエールは民衆を率いて立ち上り、議會を解散してかわりに直に公會を開催し、もつて憲法を改正せよと迫る。王妃マリ・アントワネットはブラウンシュヴァイクの宣言を利用して革命家達を脅迫するが、民衆は遂に蜂起のコンミュンをもつてこれに答えたのである。^(註四) あちこちの場末町の人々が立ち上つてチュイルリー宮に向つて行進したし、その当のチュイルリー宮では国民衛兵が寝返つた。「八時にはマルセイユの連盟兵たちがあらわれた。彼らを自由に宮廷の中庭まで入らせておいて、スイス人の傭兵たちが銃口を開き、彼らを撃退した。場末町の人々が到着すると、連盟兵たちは彼ら

の援助をえてふたび攻撃に移り、突撃した。十時頃、国王の命令で籠城軍は銃火をおさめた。国王は蜂起がはじまるとすぐ、その一家とともに、宮殿をすてて、すぐそばの馬匹調教場を会議場にしていた議会に避難していた。議会は、戦闘の結果が不たしかなあいだは、ルイ十六世を国王として扱ったが、蜂起が勝利すると、君主の権利停止を宣言し、公会の召集を議決した。王制は覆された。しかし同時にまた、ファイヤン派、すなわち革命を勃発させ、ついで最初はラ・ファイエット・つぎには三頭政治派の指導下に革命を操り抑制しようと試みた自由主義的貴族および上層ブルジョワジーが没落したのである。宮廷と密通し、蜂起を制止しようと努めたジロンド派についていえば、この派は、自分のものならぬ勝利の結果、大きくはならなかつた。これに反して受動的市民、手工業者や商店主は、ロベスピエールと山岳派に導かれ、輝かしく政治の舞台に登場した。八月十日は、まさしく第二の革命であり、普通選挙を基礎としたデモクラチックな民衆的共和国が予告されたのである。^(註六)

前節で検討したように、封建的諸権利もまたこの時以後無償かつ完全に廃棄され、農村を圧迫していた封建制度はここに根底から清掃されたし、熱狂したコンミュンは、内には最初の恐怖政治によつて多数の反革命容疑者を処刑して民衆の時代を作りあげ、外には九月二十日、ヴァルミーにおいてプロシヤ軍に圧倒的な大勝を博する。後世になつてパリ・コンミュンは、この年を名付けて「自由の第四年にして平等の第一年たる一七九二年」と呼び、ヴァルミーの戦いを観戦していたゲーテが、「この日より世界史の新しい時代は始まる」と云つたのは有名な挿話である。

(註一) GASTON-MARTIN, Les Jacobins, 1949

(註二) 同上書、二〇頁。

(註三) アルベール・ソパール『フランス革命』邦訳書上巻一六九頁。

(註四) エンゲルスは、そのカウツキー宛の一八八九年二月二〇日付の書簡のなかで、カウツキーの『フランス革命時代の階級対立』を評論し次のように述べている——

「第四節五四頁。ここでは、この、身分的秩序の外に立つ、したがつて相対的に無権利な、無保護な下層庶民が、いかに革命において初めて次第に、君が『過激共和主義』(またもや主義だ!)と呼ぶところのものに近づいてきたか、いかなる役割を彼らが演じたか、が多少は述べられるべきであろう。そうすれば、……次のようなこともわかりやすくなる。ブルジョアは、この場合にも常と同じく、彼ら自身の利益を固守するにはあまりにも臆病だったこと。バスターニユ以来下層庶民がブルジョアのためにすべての仕事をなさねばならなかつたこと。もし下層庶民の介入がなかつたならば、七月一四日、一〇月五—六日、乃至は八月一〇日、九月二日等にも、毎回ブルジョアジーはアンシアン・レジームに屈していたであろう。宮廷と結んだ聯合軍が革命を圧殺したであろう、ということ。したがつて、これらの下層庶民のみが革命を遂行したのだということ。」(岡崎訳、岩波文庫、一八五—一六頁)

(註五) これによつて成立する国民公会は、受動的たると能動的たるとを問わず、一定地に一年以上引続いて居住する二十一才以上の男子による普通選挙であつた。けれどもこれまた間接選挙で、すべての市民によつてまず選挙人が選出され、この選挙人が議会の代議員を選出する仕組であつた。

(註六) ソパール前出書、一八七—一八八頁。

第三節 山岳派独裁とサン・キュロット

ヴァルミーの勝利によつて同盟軍は一応撃退されたが、まだ打ち破られてしまつたわけではない。それどころか、翌一七九三年一月二日に遂に国王の処刑が行われたのを契機に、新たに英、和、西との間にも戦争状態がつくり出された。革命フランスは軍事的にも最大の危機におちいつたわけである。国内の反革命もまた、傷つきはしたが打ちのめされたわけではない。三月三日にはブルターニュの反革命のニュースがパリに達したし、同じ日にリオンにも反革命が起つた。ついで十日にはヴァンデの反革命蜂起が起るといふ具合である。公会におけるジロンド派がサン・キュロットの政治舞台への侵入を嫌い、あらゆる手段を通じてそれを妨害したこともことわるまでもない。サン・キュロットとそれに支持された山岳派とは、このように反動化してゆく環境の中で、それだけますます左傾化し、それだけますますテロ化し、またそうせざるをえなかつたわけである。次第に昂まる食糧の危機もまたそれを煽る。アッシニヤ紙幣の急速度の価値喪失は民衆を狂気にかりたてる。装備のととのわなないフランス軍は、やがて各地で同盟軍に打破られるようになり、あらゆる面で共和国の前途は絶望化してゆく。

そして、このような非常時体制のうちに、やがて公会のジロンド派が没落して山岳派の独裁的支配体制がうちたてられそれがいわゆる恐怖政治の形をとつたことは当然である。「かれらは危険の過剰には力の過剰で對抗した。あらゆる叛乱の息の根をとめたばかりか、抵抗や乱叛のあらゆる可能性さえ、嫌疑者の流血のなかに窒息(註)させた」。革命裁判所はずでに三月から設けられていたが、九月始めエベール派の勝利がその歴史に新しい時代を開き、まづ第一に王妃の裁判、つぎ

にジロンド派の裁判というふうには、この年の終りの三ヶ月だけで一七七七名を死刑場に送つた。その他さまざまな特別裁判所で宣告された死刑数を合せると、一七九三年三月から九月にかけて五一八名、一〇月から翌九四年五月にかけて一〇八二名、同年六月から七月にかけて二・五五四名……というような数字が記録されている。さらに、こうした血の粛清にならんで経済上、宗教上の恐怖政治が行われる。民衆に生活物資を配給するためにパンの割当符符制と公定價格制がとられ、生産の停止を防止するために食糧委員会が創設され、この委員会は生産、取引、輸送にわたる広汎な権限をもち、その全権を握っていた。違犯した商人は断頭台に送られ、農民の反抗を抑えて生産物の徴発が行われた。宗教上には非キリスト教化が強制され、公会は十一月始めコンミュンに公的祭祀を廃止する権利を認め、この月の終り、パリのコンミュンはすべての教会を閉鎖させた。

しかしながら、このように過激な諸政策は、われわれが当然に予想するように、やがてはサン・キュロットと山岳派自身の没落をもたらさざるをえない。すでに一七九三年八月二二日には、サン・キュロットの間に大きな人気をもつていた過激派のマラーが反革命派の少女の手によつて暗殺されていたが、マラーの後継者をもつて自任していたエベールもまた、この年一二月からの山岳派内部の分派闘争の結果として、翌年四月に逮捕処刑され、権力はロベスピエールとその支配する公安委員会の手にとられていたが、このように分裂抗争をこととする山岳派自体の内部対立を巧みに利用した反革命派によつて、遂にそのロベスピエールさえもが、失脚せざるをえないようにしむけられたからである。反革命派は、一方における革命軍の軍事的勝利による平和の到来、その結果として表面化した山岳派の内部対立、他方におけるそうした過

激な諸改革と統制とに次第に不満をもつてきた世論とを利用して、ここにいわゆるテルミドールの反動（一七九四年七月二七日）に成功する。さきに肅清された山岳派の過激派が、逆に公会中央派の平原派と結んで、ロベスピエールとその一派をほふるわけである。

それは、(イ)革命政府を解体してジャコバン主義のそれ以上の進展を阻止すること、(ロ)旧制度の復帰を警戒すること、の二つの政治目標をかかげることによつて、一方においては革命によつて所有権を確立した人々のジャコバンの行過ぎ嫌悪にこたえ、他方においてようやく近代的土地所有権を確保した農民達の、旧貴族支配復活の恐怖にこたえるであろう。そして、ロベスピエールなきあとのフランスを訪れるものは、こんどは逆に白色テロであり、それはまづ、フレロンの金ぴか青年とと呼ばれる伊達男たちの青年行動隊による、ジャコバン・クラブの襲撃に始まり、革命記念物の破壊、各地におけるサン・キュロットの集団虐殺となつて続く。「ジャコバンくたばれ！」の繰り返し文句を歌いながら白色テロが横行し、九五年一月には遂にジャコバン・クラブは閉鎖の止むなきに至る。▲いたるところで人の首を切つている▼、と一七九五年に一公会代議員は書いている。

だが、テルミドールの反動はなぜもたらされ、すぐれた革命家ロベスピエールを敵としながら、なぜにそれは成功したのか、われわれはここで、いま一度基本的な反省をしておく必要がある。

サン・キュロットとは、当時貴族たちの用いていた半ズボン（キュロット）をはかないで長ズボンをはいている者という意味であり、貴族達が庶民をさして呼んだ言葉である。それは、労働者を含むとはいへ、純粹に労働者的な集団ではな

い。むしろ小ブルジョワ的な集団であるといったほうが適切であろう。これは当時のフランスの経済的発達段階を考慮すれば、すぐ明らかになることである。いまだルフェーブルによつて革命当時のフランス商工業の状態をみるに、そのうち最も重要な地位を占めていたのは金融と貿易であり、まだ決して製造業ではなかつた。「金融業者は国王に対する金融によつて成長していたのである。彼等は間接税の徴収において宮廷の銀行家と結託していた徴税請負人であり、また食糧および輸送のあらゆる手段で陸海軍の補給に當つている御用商人乃至糧食商人でもあつた。：（また）貿易商人にとつて、致富の主要な源泉は依然として海上商業であつた。それはフランスの地方と地方とのあいだの取引に重要な役割を演じていた、というのは、通例、道路が重いかさばつた商品を輸送するのに困難であり、かつ運河組織が未完成であつたからである。：したがつて、経済的見地からも、社会的観点からも、工業は副次的なものにとどまつていた。△工業家▽という言葉はまだ使われておらず、職人あるいは製造人と人は言つた。全般的には、それは貿易の一附属物であつた。例えば、リオンで家内工業に従事していた職人に命令したのは貿易商人であり、彼等は貿易商人から原料を仰いでいた。資本の集中は商業的形態のものであつた。」^(註1)

もつとも、十八世紀末になるとフランドル、ピカルデー、シャンパーニュなどの北東部や、ブルターニュ、メーヌなどの西部、南部のラングドックなどに、これらの貿易商人によつて農村工業が組織されてきた。そしてそれらの農村工業がその競争力によつて都市の手工業者の生活を脅かし、彼らの反資本主義熱を煽ることになつた。サン・キュロットが募られるのは、この階級を中心にした都市の民衆の中からである。カウツキーも、その『階級対立』の中で、サン・キュロット

トの構成を、都市や農村の手工業者と賃銀労働者、小商人や居酒屋、乞食などのルンペン・プロレタリアの一部の中に求め、彼らの性格について次のように述べている。「かれらをたらぬくものは、たゞ単に特権階級、ツンフト親方、貴族、僧侶ばかりでなく、また一部は租税請負人、穀物投機業者、高利貸、企業家などとして搾取し、一部はあれやこれやの形式でかれらのすべてを競つて圧迫したブルジョアジーに対する強い憎悪であつた」。

然しながらわれわれは、このことから直ちに、彼らの性格を社会主義的と規定する誤りを犯してはならない。カウツキもまた続けている、「この憎悪や、時としてこれを表現するはげしいやり方にもかかわらず、これらの革命的な要素は決して社会主義者ではなかつた。革命以前には、自分で意識した階級としてのプロレタリアートはまだ生れていなかった。プロレタリアートはまだ全く小市民層の考え方うちに生きていたのであるが、小市民層の目標と要求は商品生産の基礎のうえに立つていた」。

(註三)(註四)

この点は重要である。要するに、もともとがブルジョワ出身である公会の山岳派代議員はもちろんとして、都市の庶民であるサン・キュロットといえども、決してまだプロレタリアートではなく、少くとも意識においてはまだ全く小ブルジョワだつたのである。時代はまだ社会主義革命をうけられない。したがつて、サン・キュロットがいかに過激な改革をおこなおうとも、彼らの行うそれらの諸改革の多くは、資本主義の成長を阻む封建的な残滓を徹底的に除去するという意味で、たゞ単に、表面彼らの敵としているその当の資本主義の成長のための、地均しを行つたにすぎなかつた。(註五)この当然として、彼らの敵は、断頭台に送られるその後から後からと、あたかもヒドラの頭のように、執拗に頭をもたげた。そ

して、それを抑えるためには、彼らはますます過激な対策をとらざるをえなかつたし、結局は彼ら自身を破滅の淵に導くことにならざるをえなかつたのである。エンゲルスは、カウツキー宛の手紙の中で、サン・キュロットの荷わされたこの皮肉な使命に言及して次のように述べている——

「この下層庶民がブルジョアジーの革命的諸要求に、それらがついていなかつた一つの意味を与えたのでなかつたならば、彼らが平等と友愛とを、これらの標語のブルジョア的意味を完全に顛倒したところの極端な帰結——というのはこの意味は極端まで押しつめられてまさにその反対物に一変したからであるが——にまで押し進めたのでなかつたならば、この革命は成就されなかつたということ。この下層庶民的な平等と友愛とは、その正反対物を産み出すことが眼目とされた時代にあつては、たゞの夢であるのほかはなかつたこと。そして、常にそうであるように——歴史の皮肉——革命的標語のこの下層庶民的解釈が、この反対物——ブルジョアの平等——法の前における——とブルジョアの友愛——擄取における——とを実現する最も有力な槓杆となつたこと」。

もつとも、このような時代的制約にもかかわらず、サン・キュロットはいま一歩でその小ブルジョワ的な粹をはみ出すところまで進んだ。次第に激しくなる生活の不安とブルジョワジーの無理解が彼らをそこまで追いこんだのである。たとえば、民衆の圧力が最高点に達した九三年九月に、パリのあるサン・キュロットのセクションが国民公会宛に一つの建議書を提出したが、その建議書は、生活必需品と賃銀との最高価格の公定、災害によつて收穫のなかつた耕作者への国家補償などの外に、財産の最高額を定めること、何人も貸付ける目的で一定面積以上の土地を所有しえないこと、一人の市民

は一工場、一商店しか所有しえないことなどを要求し、次のように述べている——、「生活必需品の価格、労賃、工業の利潤と商業の儲けなどを固定化せよ……。貴族、王党派、穩健派、陰謀家たちは諸君にいうだろう、え、何だつて？ それ
は神聖にして侵すべからざる財産にたいする侵害だと……。たしかにそうだ、だが彼ら大罪人たちは知らないのか？ 財産は
肉体的必要にのみ基礎をおくべきものであるということを知らないのか」。ここにはずで、^(註七)財産を絶対的な自然権とみ
るブルジョワジーの財産観に対して、それは万人の必要によつて制限をうけるとする観念がみられるであろう。サン・ジ
ユストもまた書いている、「金持も貧乏人もあつてはならない。富裕は汚辱だ」。

けれども、これとてもまだ、明らかに小土地所有者と手工業者とのデモクラシーでしかない。それは決して共産主義で
はない。それはまだ、社会的不平等があまり激しくは自由も平等もないとする、ルソー流の考えの域を脱しない。財産
権はその無制限な行使を制限されこそすれ否定されはしない。

(註一) カウツキー『フランス革命時代の階級対立』日高訳、八五頁、岩波本八一頁。

(註二) ルフェーブル『八九年』鈴木訳、五〇～五三頁。

(註三) カウツキー、前出書、岩波本七八頁。

(註四) 念のためつけ加えておくが、ジャコバン派といえども、その過激な外観にもかかわらず、小ブルジョアの性格を一寸も脱す
るものではない。アンドレ・リシユタンベルジェのいま一つの著書『フランス革命と社会主義』は、その第四章でこのジャコ
バン派を扱い、次のように述べている——

「ジャコバン派の中に社会主義的諸思想があつたかなかつたか？ここで再び社会主義という言葉を正確に定義しておくこと

が必要になる。若しも人々がこの言葉を集産主義だけの意味に、換言すれば生産及び流通の諸手段の共同化ということに制限するならば、固有の意味でのジャコバン主義の中には社会主義的なものは全然存在しない。国民公会の最初の日からテルミドール九日に至るジャコバン派支配の全期間を通じて、私有財産権は幾度も幾度も神聖なるものと宣言されたし、国民公会に対して非難を加えられる共産主義的性格をもつた諸行動は、公共救済のための一時的政策であり、新しい社会概念の象徴ではない。これに反して、若しも人々が社会のヨリ平等主義的理解や、富の分配に際して国家が貧民に有利なように干渉すべきであるという思想やを社会主義的であると見做すならば、もつともきわめて様々な程度においてははあるが、多数のジャコバン達が社会主義の刻印を印していたことを認めねばならぬ。実を云えば、二つの事物が（ジャコバン派の領首達を）引留めていた。すなわち一方では、彼ら領首達は、あまりにも沢山の日々の仕事に押し潰されてしまうことによつて、緊急に行うべき改革や採択すべき緊急政策があまりに沢山であつたために、次から次にと生起する危険に日々に対応してゆかねばならなかつたために、彼らの間を分割していた内部闘争のために、国家の活動力の全部を要求した対外戦争のために、停止せしめられていた。第二に、ここにこそ真実の理由が認められるのだが、ジャコバン達は屢々ブルジョワであり教養ある人間であつた。人々があまりに否認しすぎている彼らの政治的感覚が、社会革命はフランスの破滅であること、怖るべき無政府状態の始まりであること、を彼らに教えたと同時に、彼らは、彼らもまた、最も大胆な理論から実際の突現に移行するという臆病さ、すなわち一八世紀の哲学者達の特徴の一つであつた臆病さをもつていた。かくして、土地均分法の思想は、論理的には彼らにも正しいと認められた筈だが、実際には恐怖をもつて彼らによつて遠ざけられた。」（九七—一〇頁）

（註五） マルクスは、このような觀念をその『神聖家族』の中で次のように批判している——

「ロベスピエール、サン・ジュストおよびその一党が没落したのは、彼らが現実的な奴隷制の基礎のうえにたつていた古代の突現的に民主主義的な共同体を、解放された奴隷すなわち市民社会のうえにたつていて近代の精神的に民主主義的な代議制

國家と混同したからである。なんという巨人的な錯覚であろう、近代の市民社会を、すなわち産業の、一般的競争の、かつて自己の目的を追求する私欲の、無政府の、自己疎外された自然のおよび精神的な個人性の市民社会を、人權のうちに入れて否認し、裁可せざるを得ず、しかも同時にこの社会の生活機能を、あとからその個人個人においては無効なものとしながら、同時にこの社会の政治的頭脳を古代人風に錬成しようとい意図するとは！」（大月版選集補卷五・三四二頁）。

（註六） 岡崎訳、岩波文庫本一八六頁。

（註七） ソプール前出書下巻、六六―六七頁。

第四節 バブーフとナポレオン

フリードリッヒ・エンゲルスは、その『大陸における社会改革の前進』なる論文の中で、フランス革命に論及して次のように述べている――

「フランス革命はヨーロッパにおけるデモクラシーのあけぼのであつた。デモクラシーというものは、現存政府のすべての型をとつてみると、その根底では、それ自身矛盾したものであり、真実でないもの偽善（吾々ドイツ人がそれを名づけて神学という）以外のなものでもない。政治的自由とはみせかけの自由であり、ありうるかぎりの最悪の奴隷制であり、外見上は自由で、だから実質は隷従である。政治的平等もまた同様である。だからデモクラシーというものは、政府の他のすべての他のかたちとおなじように、けつきよくは粉碎されるべきものである。偽善は存続することはできないしそのなかにかくされた矛盾はばくろせずにはいない。吾々は額面どおりの奴隷制――いいかえれば仮面をかぶらない専制

主義か、さもなければ、真の自由、そして真の平等——いいかえれば共産主義をもつか、いずれかでなければならぬ。

この両方の結論はいずれもフランス革命のうちであきらかにされた。ナポレオンは第一のものを確立し、パブーフは第二のものを確立した。……その共産主義計画は成功しなかつた。なぜなら、そのころの共産主義そのものが、ひじようにあらけずりで、底のあさい種類のものではあつたし、また他面では公共精神がまだそこまですすんでいなかつたからである。^(註)

テルミドールの反動以後のフランスは、すでにみたように公会平原派の支配するところであり、翌九五年八月には、デモクラシーに反対して九一年の憲法さえも改悪する共和国第三年の憲法が制定されるというように、革命は一路下り坂に向う。八九年の人権宣言の基本的な条項(「人は生れながらにして自由かつ平等の権利をもつてゐる」)さえも、「平等は法が万人にとつて同一であるということに存する」という表現に変えられてしまう。普通選挙は廃止され、選挙権は、同一の場所に一年以上居住して直接税を支払つてゐる二十一才以上の男子にのみ与えられた。「持てる人びとの統治する国は社会秩序だが、持たない人たちの統治する国は自然状態である」とボワシー・ダン格拉斯は宣言してゐる。ダン格拉斯のいうように、テルミドール以後のフランスは、まさしく「持てる人びとの統治する国」であり、持てる人々がその支配を固めてゆく時代に移つたわけである。いやそれどころではない。この公会平原派の支配さえもが、九五年一〇月から九五年十一月にわたる執政官政府の統治の後、革命暦第八年ブリュメール十八日(一七九九年一月九日)のクーデタによつて、遂に独裁制にとつて代られる。すなわち公会は、九五年一〇月(革命暦第四年ブリュメール四日)に解散して、

五人の執政官よつて統治される執政官政府に席を譲つたが、この五人の執政官（ラ・ルヴリエール、ル・トゥルヌール、レウベル、バラス、カルノー）は、旧貴族のバラスを除いていづれもブルジョワ出身であり、中流ブルジョワ的共和主義のまじめな代表者だつたが、このブルジョワ共和国さえもが、第二次執政官政府のあがきのあとで、遂に一將軍ナポレオンの独裁に道を譲らざるをえなかつたのである。

そして、バブーフの陰謀が計画されるのは、こうした過程の真只中である九六年五月においてである。

フランソワ・エミール・バブーフ（FRANCOIS-EMILE BABUUF）は、一七六〇年に、北フランスのサン・カンタンに生れた。父クロード・バブーフは、小作農場の使用人、日雇労働者などの職を転々とした後でオーストリアに行き、そこで将来ジョセフⅡとなる人物の教師を務めた男である。したがつてバブーフは、若干の教育（数学、ラテン語、ドイツ語）をうけたが、家が貧乏だつたので、ある地主の家のお抱え執事の書生になつた。二二才の一七八二年に当時の主家の女中と結婚し、代書人として家を構えた。そして職業上土地問題にふれているうちに、生活の困窮と恰もこの頃彼が読んだルソーの著書の影響とは、彼の身内に次第に反逆の精神をはぐくんていつた。

遺された友人宛の書簡によれば、一七八九年以前に彼はすでに大きな革命の到来を予言し、次第に共產主義の方に傾いていつたことがわかる。したがつて、革命が現実には勃発した時、彼は熱心にそれを支持した。八九年七月にはパリに出向いたがやがて再び家に戻り、そこで運動に従事しているうちに、政治活動の行過ぎから二ヶ月の間投獄されることになつた。けれども出獄後は再び運動に戻り、『ピカルディ通信』を創刊して貴族階級を攻撃し、被抑圧者達の利益を護つた。

九〇年には二度目の入獄をするが、出獄すると再び闘争に戻る。そして、次第に土地均分法の支持者になつてゆく。その結果、一方には下層民衆の支持を次第に強くと共に、あまりに過激であると警戒する人々の数も増えることになつた。九三年二月には、地区の委員会が、国有地の競売証書を偽造したという嫌疑で彼を裁くべきことを決定したので、彼はパリに逃亡し、そこで種々の役目についた。けれども、被告缺席のまま判決を下した故郷モンデイエ地区の裁判官の要請によつて三度び逮捕され、二度目の入獄することになる(九三年一二月)。出獄後はパリに移り、そこでグラックス・バブーフ (Gracchus Babeuf) の名の下に、『出版の自由の擁護者』を創刊するが、やがてテルミドールの反動が訪れ、反革命派として四度目の逮捕をうけることになる。そしてアラスの監獄に投獄されることになるが、ここでの入獄が、やがて彼に将来の陰謀を準備させることになるわけである。なぜなら、彼はこの監獄で将来の同志達にめぐり合うことになつたからである。

当時の共産主義運動の主な斗士たちは次のような人たちだつた。先づブオナロティ、彼は一七六一年イタリア生れの傭兵人で、哲学者で法律家であり、大革命の初期にコルシカ島で大きな役割を果した後種々の使命を果しているうちに、テルミドール派によつて逮捕された。ダルテはバステーヌの戦士の一人であり、同じくテルミドールの犠牲者になつた峻厳かつ大胆不敵な男である。シルヴァン・マレシャルは詩人でジャーナリストであり、早くから唯単に政治的な革命でなく社会的な革命を主張していた。ゲルマンはもと軽騎兵の士官だつたが、革命的な演説を行つたために免職されて入獄した後、ますます激しく運動に深入りして行つた同じくテルミドールの犠牲者で、激しい気性の雄弁家である。ベルトランは

もとは裕福な製造業主だったが、九二年にリオンのコンミュニオンを指導したために、ロベスピエールの共犯者としてテルミドルに逮捕された人物である。その他ル・ブルティエ、アントネル、ドボン、ディディエなど、要するに大革命をしてヨリ一段と前進せしめ、たゞ単に法の前の平等だけでなく経済的な平等をも実現させようと願つた人々であり、テルミドル以後の軍事的独裁を準備することになつた新しい貴族制に対して、激しい憎悪をもつた人々である。

革命暦第四年霧月（一七九五年十月）に、バブーフは若干の同志の協力をえてパンテオン・クラブをつくる。すなわち共和主義者を結集し、無感覚になつた民衆の心を再び刺戟することによつて、真実かつ全面的な平等の実現をはかるうとする人々のクラブである。この企ては時勢の推移に不満をもつ旧ジャコバンたちの知的要求にアッピールし、クラブはまもなく二・〇〇〇人の所屬者をもつようになり、地方にもそれに倣うものが作られ始めた。そこでこの運動に不安を感じた執政官政府は、直にバブーフを逮捕しようとする。彼は逃亡し、こんどは地下からその新聞『護民官』によつて財産の不等等を攻撃し、ますます激しく公衆に呼びかける。政府は彼の妻と子供達を逮捕投獄し、ダルテが『護民官』の一論説を公衆の面前で読んだことを理由に、ボナパルトの手によつてクラブを解散せしめる（革命暦第四年風月九日）。

バブーフ達が執政官政府の暴力的顛覆を考えたのはこの時である。あたかもこの頃、フランスの民衆は物質的窮乏のどん底にあつた。「窮乏は怖るべきものだつた。人々は \wedge へエのように \vee 飢え死にした。さらにまた他の人々は、あまりの苦しさから逃れるために自殺した」とその『フランス革命と社会主義』の中で、リシュタンベルジェは書いている。共和暦第四年霧月二十九日の一報告書も指摘している、「飢餓と絶望とが厚いヴェールでもつて財産の尊重という言葉を掩つ

ている」。かくしてリシユタンベルジュはいう、「このような環境においては、バブーフの陰謀が誕生しその支持者達を駆り集めた理由を、人々は容易に思い描くことができるであろう」^(註二)。周囲の諸事情は、バブーフの目にも好都合と思われた。食糧が不足していればいる程、生活費が高ければ高い程、民衆の不満はそれだけですますます大きいわけだし、それこそ蜂起に好都合と思われたのである。いまや、九三年の民衆的憲法を実施に移し財産共同体の樹立を目標とした、暴動の組織を作りあげるべき時期である。

かくして、一つの委員会がバブーフ、アントネル、シルヴァン・マレシャル、ル・ブルティエ、ダルテ、ブオナロテイ、およびドボンによつて結成された。この委員会が、蜂起のやり方とその後樹立されるべき新制度の骨組みについて草案をこしらえた。けれども、その情熱とその知的明敏さによつて全体を統率しているのは、事実上バブーフである。市民委員がパリのあらゆる街区で働きかける。蜂起の成功にとつてその協力が絶対必要とみなされている軍隊に対しては、軍事委員が働きかける。新聞、ポスター、パンフレット、家庭での談話、などは綱領の普及には役立つが二次的役割りしか演じない。なにより肝心なのは首都の占領である。なぜなら、従来の経験に徴して、フランスを握むためには何よりも先づパリの占領こそ必要であることが知られているからである。もつとも地方が全く無視されたわけではなく、リオンやパ・ド・カレ県、ノール県、マルヌ県、ヴァルにも行動拠点が設けられた。一七九六年三月、組織は準備を終つた。成功は確実と思われた。このことは、政府要路者の一人であるバラスさえもが、あいだに幾人もの人を介在させて組織に関係をもとうとしたことから、軍隊が支持を通告してきたことから、間違いないように考えられた。

いよいよ時節到来とみた委員会は若干の職業軍人達と最後の会合をもつた。ところがこの時まで、同志の一人グリセルによつて裏切りがなされ、一切は政府側に通報されていたのである。さらにまた裏切りは、それ以前にも、彼らと行動を共にすることが予定されていた山岳派の側からもなされ、カルノオによつて陰謀者二四一名のリストが政府に提出されていた。たゞこの時は政府側が逮捕に向う時間を誤り、包圍した時は解散した後だったのである。グリセルの裏切りによつて再び会合の日時を知つた政府側は、バブーフ達が、彼らが一七、〇〇〇人(そのうち九、五〇〇人は正規軍隊)と見積つている自分達の勢力を検討し、蜂起の計画を最終的に決定するために会合したところを包圍した。逮捕は成功した。蜂起は完全な失敗である。人民大衆は無関心であつたし、旧ジャコバン達は茫然自失してなすところを知らなかつた。もつとも、逮捕を免れたバブーフ主義者達は、革命暦第四年草月(註三)(一七九六年五月)に再びグルネル兵營の暴動を計画するが、これまた不成功に終つたし、実月(八月)に計画された数百人からなる三度目の計画もまた、こともなく粉碎された。バブーフは九六年八月にヴァンドームに護送され、九七年二月から五月にかけて同志と共に裁判された。バブーフとダルテは死刑、他の七人が流刑に処せられた。

(註一) 大月書店版マル・エン選集補卷五所収、一五二頁。

(註二) リシユタンベルジェ『フランス革命と社会主義』一七六頁。

(註三) 革命暦はフランス共和制の宣告された一七九二年九月二一日を革命暦第一年葡萄月一日とし、以下霧月、雲月、雷月、雨月、風月、芽月、花月、草月、取入月、熱月、実月と、一年を一二ヶ月、一月を三〇日に分ち残りの五日を「サン・キュロットの

日」として「徳」、「天才」、「労働」、「意見」、「報償」の祭日にあてる。

第五節 バブーフ主義

バブーフの陰謀の性格は、遺された文書によつて明らかにすることができる。先づシルヴァン・マレシャルの筆になる
とされる第一の文書『平等者宣言』(Le Manifeste des Égaux)をみると次の如くである——

「フランスの人民諸君！

一五世紀の間、諸君は奴隷として生きてきたし、したがつて不幸であつた。六年前から諸君は独立、幸福、および
平等の期待の中で辛うじて呼吸している。

平等！自然の第一の願い！人間の第一の欲望でありすべての正当な結社の主要紐帯！フランスの人民諸君よ、諸君は
この不幸な地球上に植物のような生活を送つている他の諸国民以上には優遇されることがなかつた。いつでもそして何
処でも、哀れな人々は多少とも狡猾な人喰人種共に引渡され、あらゆる野望にとつての玩弄物、あらゆる暴政にとつて
の牧場の役目をつとめてきた。いつでもそして何処においても、彼らが言葉と一緒に物そのものを手に入れたことはな
かつた。記憶することのできない遠い昔から、人々は猫をかぶつて繰り返している、人間は平等である、と。そして、
記憶することのできない遠い昔から、人間の品性を最もひどく墮落させる不平等が横柄に人類の上にのしかかつてい
る。…平等とは、一つの、法律上の、美わしい、不妊の擬制以外のものではない。それヨがり強い声で要求されている今

日、人々はわれわれに答える、黙れ、貧民共！事実上の平等とは一つの空想でしかない。条件付の平等で満足せろ。お前達はみんな法の前には平等である。畜生！これ以上何が必要というのか？ われわれにこれ以上必要なものというのか？立法者や政治家や裕福な地主共よ、今度はお前たちの方が聞け、われわれは皆平等である、そうお前たちは云うのだな？この原則はまだ確定されていないまゝだ、なぜといつて、少くとも気でも狂つていないかぎり、実際は真昼間なのに今は夜だなどとは本気ではいえないからである。

そうだな！われわれは今後、われわれが生れた時のように平等に暮し平等に死んでいくことを主張するし、われわれは実際の平等かさなければ死を望む。これがわれわれの必要としているものだ。——（以下略）」

「(一)、人民は暴君政治に反対して蜂起している。

(二)、蜂起の目的は一七九三年の憲法、自由、平等および共同の福祉の再建である。

(三)、…以下(四)まで省略……………

(四)、一切の反対は即座に力によつて打破されるべきである。反対者は皆殺しにされねばならぬ。

(五)、非常警報を叩く者および叩かせる者、街路上に居合せた外国人もまた同様に殺されるべし。

(六)、あらゆる種類の食糧品は公共広場にいる人民の許に持参するべきである。

(七)、すべてのパン屋は、人民に無償で分配するためのパンを絶えず製造するために徴用される。

(四) 人民は暴君政府顛覆後にしか休息をとるべからず。

(五) 亡命者達、謀叛人共、および人民のあらゆる敵の財産は、遲滞なく祖国の防衛者達に分配される。共和国全部の

不幸な人々は即刻それらの謀叛人共の家に宿泊せしめられる。

(六) 土地は国有私有を問わず人民の管理下におかれる。

(七) 革命の締めくくりをする世話はい各県一人当り選出された民主主義者によつて構成された国民議会に委せられる。」

ところで、リシュタンベルジェによれば、バブーフ主義の中には大きく二つの潮流がある。主としてシルヴァン・マルシャルによつて代表されるその一つは、ジャコバンの平等主義の流れであり、運動の主流をなし、いま一つは、バブーフによつて代表される共産主義の流れである。前にみたように、アラスの監獄で偶然一緒になつた様々な経歴と思想の持主達が、たゞ現政府を倒すという一つの目標の下に、互に誓約して作りあげた結社がこの運動の中核であるし、ある一つの理論によつて統一されることから程遠いのが、その特徴であつた。さらにまた、蜂起に動員されようとした民衆や軍隊についていえば、彼らには何ら確乎たる思想があつたわけではなく、たゞ不満がわまる現状を打破することだけがその目的であつた。バブーフの手記の一つは、頻繁な休暇と金持の掠奪とを約束することによつて兵士達を味方に引入れねばならぬ、と述べている。かくしてそれは、リシュタンベルジェによれば、「高級幹部だけが完全な教理を知っている一種のフリーメーソン」に比較されることができる。

ともあれ、バブーフ自身の思想はその残された各種の文章によつて明らかである。すべての人間はあらゆるものに対し

て常に平等な権利をもつている。ある人々の財産の優越は、彼が他の人々から盗みを働いたことに由来する。その欲望の限度をこえて所有する一切のものは盗みである。財産の世襲は不正であり、才能の優越に対する一切の尊敬は危険である。同一の労働は同一の価値をもち、同様の報酬をもつて酬いられるべきである。そして、これら凡ての権利を守りこの正当なる平等を樹立する方法は唯一つしかない。それは自然によつて人類に指示されているにも拘わらず人類がそれから遠ざかる誤りを犯している共產主義である。かくして、すべての土地は共有に移されねばならぬ。すべての労働生産物は社会全体の処分に委されねばならぬ。それは現物のまゝ共同の倉庫に収納され、そこで全員に平等に分配されねばならぬ。教育は平等であらねばならず、あらゆる人間に同一の内容でなければならぬ。相対的平等はその維持にきわめて困難であり、むしろ完全な平等こそ樹立に容易である。これが彼の考えの概要である。

このように粗雑な理論と無謀な見透しとをもつて計画された彼らの蜂起は、すでにみたように、その首領達が逮捕されると共に、根柢から失敗した。なるほど都市の民衆の生活窮乏は彼らの蜂起の有力な支えであつた。けれども、革命を真実に押し進めてきたものは、前にみたように、終始農民であつた。都市における指導者達が兎もすれば妥協に安んじようとするその度毎に、その蜂起をもつて彼らを鞭打つたのは、常に農村であつた。したがつて、もしも農村が引続いてその革命性を維持し続けていたならば、その都市における指導者達の逮捕をもつても、共和国の社会主義化への歩みは、決してここに止まることはなかつたであろう。しかしながら農村は、この時すでに、九三年を境に保守主義に急転回していた。農民を革命的ならしめていた封建制度はすでに無償で廃止され、彼らの多くは今や土地所有者に變つていた。彼ら

は失うべき何物ももたず、むしろ守るべき多くの物をもつていた。なるほど、土地均分の要求とそれを支持する貧農達の不満とは、まだ解決されずに残されている。けれども、貧農といえども土地を持つフランス農民の特殊性は、いまやそうした要求や不満が真実には支持せられないようになる構造を、もともともつていたのである。時代の要求したのは明らかにナポレオンであり、九三年後の今、もはや決してバブーフではなかつた。

この間の事情は、一八四八年に書いたその紀行文『パリからベルンへ』の中で、すでにエンゲルスが明らかにしたところであるが、^(註)リシュタンベルジェもまた、次のように述べている——「大革命の発端においては財産権を覆えたいという願いは社会のどの階層にも存在しなかつた。革命の全期間を通じて、農民達は土地所有者になるのに努力した。彼らが常に必ずしもきわめて合法的に土地所有者になつたわけではないことや、財産権に対するかなりに侵害的な多くの行為が犯されたことは、確認されている。けれども、それは殆んど無自覚に行われたものだし、その方が正当であると判断された権利を行使する目的で、行われたのである。そこには、若干の例外的な場合を除けば、現実に社会主義的ないし平等主義的と論証された、何らの傾向も存在しない。都市においては、あらゆる時代を通じて、飢えにガツガツした、騒ぎ好きの、掠奪好きの貧民達が存在したし、彼らは、一時の豊富の中に飽食するために一切を破壊することを欲したようであるが、いかなる意味でも一つの社会的党派を構成してはいなかつた。この擾乱的な要素から区別しなければならぬ固有の意味でのジャコバンについては、われわれがすでに示したように、彼らは真実の意味での社会主義党派ではなかつたし、稀な例外を除けば、首領達においても、祖国の敵の手中にある富に対する一時的怨恨と、民衆の幸福は一切を要求す

る権利があるという固い確信以外のものを、認められない。ジャコバン派の自覚的で活動的な部分は僅かだった。それはロベスピエールの失脚以後幾度も幾度も大量に死刑に処せられ、権力を剝奪された。民衆を押し潰した極度の苦悩と窮乏とが、その時、生きるためにはどんな人の腕の中にだろうと身を投じようという気分になり、民衆をならせた。けれども、極度の苦悩の時期は自覚的な政治的社会的党派を誕生させることができなかった。不満にみち飢えにかられた民衆のうち、パブーフの思想を完全に理解したのは、実際には幾人かではしかなかった。殆んど世間全部が彼の死刑を是認し、ないしは無関心にみえた。むしろ、大革命が中流階級に横取りされたという確信は、民衆の一部の間に支配し続けた。けれども、静穏で安全を保証されていた、という欲求が一切を支配していたこともまた、事実である。かくして、国民の全体が熱狂をもつて執政官政府を歓迎した。人々は混乱にあまりにも飽きあきしていた。農民達は、一般にその願いの対象をすでに獲得し終つていたか、ないしは恐怖政治によつて余りにもひどい試練をなめていたので、現状に満足していた。都市は休息だけしか願つていなかった。だからして、ある限られた人々の心を浅く耕したにすぎない社会主義的改革の思想は執政官政府がフランスにもたらした物質的負担軽減の中に、殆んど全面的に消滅したと言明することができる。(註三)

(註一) 「第一次フランス革命において、農民たちはまさに、彼らの最も手近な、最も明瞭な私的利益が要求した間は、すなわち従来封建的關係において耕作した彼等の土地上の所有権、この封建的關係の回復し得ざる廃止、および彼等の地方からの外国軍隊の撤退が彼等に保証されるまでは、革命的にふるまつた。これが達せらるゝや、彼等はひたすら盲目的な所有慾に駆られて、大都市の彼等の理解しておらぬ運動、わけてもパリの運動にくつてかゝつた。保安委員の無数の告示、国民議會の無数の

布告、殊に最高價格および商品買占者（買占者又は小麦暴利者）、遊撃隊および巡回裁判のギロチンに関する布告は、我儘なる農民を目あてとせねばならなかつた。しかも、外国軍隊を追払い内乱を鎮定した恐怖政治によつて、まさに農民ほど利益をうけた階級は一つもなかつたのである。ナポレオンが五人執政内閣のブルジョア支配を仆し、平和を回復し、農民の所有関係を確立してこれを彼のコード・シヴィルにおいて許可し、外国軍隊をますます遠く国境から駆逐するや、農民は熱狂して彼に力を協せて彼の主な支持者となつた。というのはフランスの農民は狂信的といつてもよいまでに国粹的なのだからだ、彼がフランスの（土地の）一片を世襲財産として所有して以来、ラ・フランスは彼にとつて非常な重要さを持つに至つた。」（改造社版マル・エン全集、第四卷所収、二一四頁）

（註二） リシュタンベルジェ『フランス革命と社会主義』一七九—一八〇頁。

〔未完〕

後記

この稿はほぼ一八四八年頃までを予定したフランス社会主義の歴史の最初の部分である。大革命以後の部分は機会を改めたい。